山梨新報「直言」原稿

平成十六年八月二〇日

「なぜ「無党派層」は増えつづけるのか」

山梨大学　理事・副学長　伊藤　洋

去る7月7日付山梨日日新聞報道によれば、山梨県内の政党別支持率調査で、ついに「無党派層」が44・9%と第一党の座を占めたという。躍進著しい無党派層のことだから、何時かはと予想されたことではあったが、第一党と聞けば改めて感慨深いものがある。

無党派と一語で片付けているが、これほど言語矛盾している呼び名も珍しい。「無党」は不適切な呼称である。それでいて、この中には投票所に一度も足を運んだことの無い正真正銘の政治的無関心層10〜15%も含まれているので話が厄介だ。ここでは、こういう正真正銘の無関心層を除いた「無党派層」について扱う。

無党派層が時代の脚光を浴びたのは、1995年に行われた東京都知事選挙に政党色の薄い青島幸男氏が出馬し、組織的な選挙運動もしないままに颯爽と当選。こういう椿事を出来させた「犯人」探しが行われ、これが「無党派層」の仕業だとして一躍マスメディアの寵児になったのが始まりである。この例に見るように、無党派層は実は政治的関心の至って高い層なのである。

しかし、一方で近年国と地方とを問わず選挙の投票率は着実に低下している。それに反比例するように無党派層と呼ばれる階層の比率も着実に増加しているのであるから、無党派層は投票率を下げている当事者であることもまた明白である。

こういう政治的関心の爬行的な変動が、既存の政治家には理解できない。ために、「無党派層は眠っていてくれた方がいい」などと徒言を言って顰蹙を買った元総理大臣がいたりするのである。政治的に強い感心を秘めながら、時として投票所にも足を運ばないことがある。これが「無党派層」の行動様式なのだから、その生態に無理解な既成政党人には分かりにくいであろう。

過去半世紀近く、我が国の政治は、いわゆる五十五年体制と呼ばれ、保守合同された保守政党と左右社会党の合同による

革新政党を中心とする枠組みで作られてきた。その左右両派の政治的対立は、同時に世界大の冷戦の枠組みと入れ子のように合致していたから、事の良し悪しを別にして、国内政治の枠組みとしては型にはまって堅固なものであった。しかし、ヨーロッパで冷戦が終焉を迎えると、世界は新しい秩序を求めて激しく動き始めた。

冷戦時代を、資本主義か社会主義かを単元的に争点とする「モノイシュー」の時代と呼ぶとすれば、冷戦終焉後の世界は、何もかもが多元的に争点となる「マルチイシュー」の時代だと言うことができる。そのマルチイシューを、離合集散した政党集団で仕切ろうという無理が祟って、やむなく発生したのが無党派層なのである。

特に、英米を真似し、二大政党制が良いとして、衆議院に小選挙区制度を導入した。予想通り弱小政党潰しは行われたが、その結果、多元的な市民的要求を処理する政治的人心収攬機能も一緒に破壊されてしまったのである。

ところで、社会を構成している人間が、地主、資本家、農民・工場労働者で分類できた時代には、無党派層など存在しなかった。物質的な豊かさの中で、ミドルといわれる多種多様な社会的階層が生まれ、成長したにもかかわらず、それを収攬する政治的組織が無いのである。

こういう複雑な時代背景からも、小選挙区制度は不具合であって、少なくとも二つを超える数多くの政治的集団が活動できる場を用意しなくてはならなかった筈だ。

山梨県でもついに無党派層が第一党になったという。かつてのモノカルチャーな農業県山梨が、今やマルチカルチャーの支配する都市へと変容したことの証左なのである。

まだ、農業景観が残っている果樹地帯や水田地帯であっても、専業農家は壊滅的に減少し、新開地の住宅団地には土着の住民に替わって知らない顔の非農家住民が居住し、大型ショッピングセンターができて、周辺の町村から人々が多数流入してくる。伝統的農村集落の「長」の支配権が消滅すると共に、家庭内でも家父長の権威が弱化し、着実に社会参加の幅を広げた女性たちは、もはや男の論理には一定の距離を置いている。

無党派層が動くとき地域は確実に変化する。それが何時になるかは未だ分からない。が、その時山梨は大きく変わるだろう。良い方へか、悪い方へかを別にして。